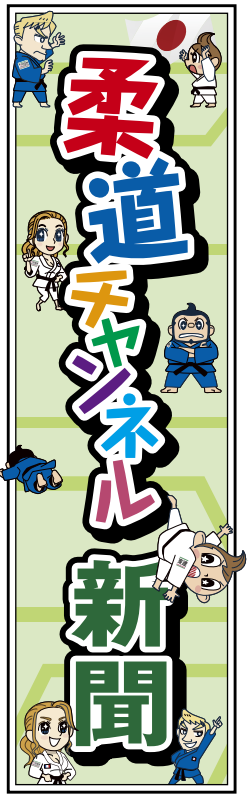

〝東京の星〟阿部兄妹の強さ際立つ！
初日、男女全7階級制覇！

▲阿部一二三(66kg級)が決勝で丸山城志郎を破り連覇を達成。GSにもつれる苦闘に決着をつけると大きな雄叫びをあげた。

師走恒例のビッグイベント、柔道グランドスラム東京2017が、平成29年12月2日(土)、東京・千駄ヶ谷の東京体育館においてスタートした〈3日(日)まで開催〉。昨年まで3日間で開催されていたこの大会だが、今年は土日の2日間に圧縮。両日ともに7階級が行なわれるとあって、見所たくさんの大会となった。

大会初日、男子は60kg級から73kg級、女子は48kg級から63kg級の軽い階級7階級が行なわれ、日本は全階級で優勝の好成績を収めた。ただ、今夏、ブダペストの世界選手権のチャンピオン5人が出場していたが、優勝したのは60kg級の高藤直寿(パーク24)と66kg級の阿部一二三(日本体育大2年)のわずか2人のみ。他の3階級は世界王者が敗れる波乱の大会となった。

世界王者の阿部が強さ発揮 来年の世界選手権代表内定

今年のブダペスト世界選手権66kg級で優勝を果たし、この階級の第一人者として今大会に出場することとなった阿部一二三。実力もさることながら人気でも日本のトップと言ってもいい選手だ。

その阿部は第一シード。2回戦から出場すると、まず初戦はペルーのガビディアを一方的に攻め込み、小外刈りと背負い投げで「技あり」を2つ奪い、最後は、相手の「指導3」により完勝。続く3回戦のシェイベル(ドイツ)には、袖釣り込み腰、背負い投げで「技あり」を奪ったあとに、腕挫ぎ十字固めで、これまた完勝。

そして準々決勝は、過去2度(2015年2月のグランプリデュッセルドルフと7月のグランプリウランバートルで)負けているダワドルジ(モンゴル)との対戦。最近の試合内容を見ると、全盛期に比べ少し力が落ちている感じが否めないダワドルジだが、逆に言えば、この2年の阿部の成長を確かめるにはちょうどいい試金石と思われた。

阿部は、体幹が強く、接近戦を得意とするダワドルジに対し、接近戦でも互角に戦うと、GS(ゴールデンスコア・延長戦)に入って疲れが出てきたダワドルジを大内刈から押し込んで「技あり」を奪って快勝。成長した姿を見せた。

さらに阿部は、準決勝でも好調の磯田範仁(国士舘大4年)に背負い投げで一本勝ちして決勝へ進出。決勝では、一昨年の講道館杯全日本体重別選手権大会で阿部を破り、リオデジャネイロ出場の夢を打ち砕いた、最大の難敵・丸山城志郎(ミキハウス)に対し、かなりの苦戦を強いられるも、両者「指導」2つであとがなくなったGSで、阿部が起死回生の大内刈り一閃。場外際で放たれたこの技に、丸山は背中から落ちて「一本」。阿部が見事な内容で優勝を果たし、来年アゼルバイジャンで開催される世界選手権代表に内定した。

▲66kg級決勝。GS52秒、阿部の大内刈に丸山が背中から落ち「技あり」。

ブダペスト世界選手権のときに比べ、対戦選手に研究されている印象を受けたが、相手の研究のさらに上をいくパフォーマンスで優勝したのは、やはり非凡な才能のなせる業。さらなる成長を期待したい。

また、詳細は後で書くが、52kg級の阿部詩との兄妹優勝でも、この日の話題をさらった。試合後の取材でも主役はもっぱらこの二人。舞台が大きくなればなるほど輝きを増すという点はまさにスター戦抜群の兄妹と言えそうだ。2020年東京の主役になりえる可能性大の逸材と言って間違いないだろう。

▲兄妹で優勝を果たした阿部一二三(ひふみ)と詩(うた)。妹の詩も2020年東京の最有力候補になったと言える。

世界王者・橋本を破り、新鋭・立川が初優勝！

先のブダペスト世界選手権73kg級で優勝した橋本壮一(パーク24)と昨年のリオデジャネイロ五輪金メダリストの大野将平(旭化成)が出場し、頂上対決の実現に期待がかかったが、大野はわずか1試合をしただけで棄権。唯一の試合、リスマンベトフ(キリギスタン)戦は、リオデジャネイロでの戦いぶりには遠く及ばない身体の切れで、棄権の理由を「膝の負傷」とし、それ以上を語らなかったが、やはり調整が不十分だったようだ。

大野との直接対決を熱望していた橋本も、この大野の棄権で肩透かしを食ったことが理由ではないと思うが、準決勝で大学の後輩・立川新(東海大2年)にGSで反則負け。国際大会での連勝記録も、世界選手権までの8でストップすることになった。

この橋本に土をつけ、決勝でもマルゲリドン(カナダ)にGS「指導2」優勢勝ちし、見事グランドスラム初優勝を果た

した立川だが、この優勝は決してフロックではない。

所属の東海大学・上水研一朗監督は、11月の講道館杯で立川が優勝した際、「次のオリンピックを狙える逸材ですよ。とにかく組み手と受けが強い。重量級の選手とやっても組み負けないし、投げられないですからね」と話していたが、今大会でも、投げられそうな場面はほとんど皆無。常に組み勝って試合を進め、「指導」を先に取られることもない。この日も6試合で先に「指導」を取られた試合はひとつもなく、寝技による一本勝ちが1試合あった以外はすべて反則勝ち(4試合)かGS「指導」による勝利だ。正直、見ていて面白い試合とは言えない。投げて「一本」というような爽快感はない。しかし、本当に強い。橋本も前述したように、GSで反則負けを喫した。橋本程の組み手巧者が、立川の組み手の強さに、ジリジリと追い込まれていく。これは一種異様な光景だ。パワフルな外国人であっても、追い込まれ、技を出せなくなってしまう。待っているのは「指導」、そして「反則負け」。接近戦を得意とするモンゴル選手や組み手の厳しい韓国選手を相手にしても、その組み手の強さ、優位性は変わらない。

決勝のマルゲリドンは、いわゆる「首抜き」で「指導」を2つ取られて敗れているが、実は、この「首抜き」が立川の真骨頂。本人はうれしくないかもしれないが、立川の代名詞と言ってもいい技術だ。

上水監督は「『盾と矛』で例えれば、立川は現時点で素晴らしい盾を持っています。受け、組み手の強さはまさに一級品だと思います。でも矛はまだまだこれから。矛が強くなれば、さらに強くなりますよ」と話す。

注目されていた大野と橋本の対決から一変、ニュータイプのヒーローの誕生で、73kg級の勢力図自体が塗り替えられそうな状況になってきた。

▲ 73kg級準決勝。新進の立川が世界王者・橋本の技を完封し、「指導3」反則により勝利。

世界王者・高藤が執念の金 アゼルバイジャン行き確定

海外の有力選手としては、モンゴルのガンバット、ダシュダワーらが出場していたが、60kg級の一番の見所は高藤直寿(パーク24)と永山竜樹(東海大4年)の戦い。昨年のこの大会では永山が高藤に内股で一本勝ち。そして、全日本選抜体重別選手権大会でも永山が高藤に小外刈りで勝っており、高藤が、今年世界王者返り咲きを果たしたとは言え、永山には2連敗したまま。高藤にすれば、ここで絶対に永山を破っておきたいという気持ちが強かった。

気持ちが乗らずにあっさり負けることもある高藤だが、気持ちの入ったときは強い。

高藤は、2回戦スターケル(スロベニア)を上四方固め、3回戦のペリム(ブラジル)を小内刈り「技あり」で破ると、準決勝で永山と相対。相性が悪いのか、苦手意識があるのか「指導」2つを取られ絶体絶命となるも、終盤に隅返しで「技あり」を奪って逆転。世界王者の意地を見せるような戦い方で永山を退けた。

高藤の決勝の相手は、ダシュダワー。この試合は、GSにもつれる接戦となったが、最後は、ダシュダワーが密着してきたところに、タイミングを合わせ、浮落としで「技あり」を奪って優勢勝ち。ダシュダワーの技に合わせて乗っただけでは、との見方もあったが、高藤は、俺が身体を捻って投げたのだと言わんばかりのアピールをし、モニター確認の末に「技あり」の判定。高藤が執念で勝ち獲った優勝だった。

▲ 60kg級決勝。高藤直寿が「気合」の浮落としでダシュダワー(モンゴル)に勝利。

ブダペスト世界選手権前までは波に乗っていた永山だが、高藤が巻き返して世界王者に返り咲き、現在は少し高藤のほうが分のいい状態。両選手の対決はこれからさらに激化していきそうだ。

男子階級別順位表

階級	60kg級	66kg級	73kg級
優勝	高藤 直寿(パーク24)	阿部 一二三(日本体育大学2年)	立川 新(東海大学2年)
準優勝	A.DASHDAVAA(モンゴル)	丸山 城志郎(ミキハウス)	A.MARGELIDON(カナダ)
3位	志々目 徹(了徳寺学園職員)	磯田 範仁(国士舘大学4年)	橋本 壮市(パーク24)
	永山 竜樹(東海大学4年)	B.AN(韓国)	J.AHN(韓国)

52kg級で新星・阿部詩が初優勝！ 48kg級は近藤が新旧女王対決制す

阿部詩が世界女王の志々目を下し金！

女子で最も注目を集めた52kg級。世界王者の志々目愛(了徳寺学園職員)、世界2位の角田夏実(了徳寺学園職員)、そして阿部詩(夙川学院高校2年)、三者三様の柔道スタイルということもあり、果たしてどのような戦いをし、勝ち上がってくるのか注目された。

シードの関係で、この3選手がプールAとプールBに配置され、志々目と阿部が準々決勝、勝った選手と角田が準決勝で対戦するという残念な組み合わせとなり、実際、2回戦を勝ち上がった志々目と阿部が準々決勝で対戦することとなった。

ブダペスト世界選手権で、抜群の内容で優勝し、この階級の第一人者となった志々目だが、伸び盛りの阿部の快進撃は止められなかった。内股の切れには定評のある志々目は、「挑戦する気持ちでいった」という通り、序盤から果敢に内股で攻め込んだが、阿部はこの内股を狙い、一旦受けてからめくり返して「技あり」を奪うと、終盤の志々目の内股、小外刈りを「指導」ひとつでしのぎ切って優勢勝ち。下剋上の第一段階を突破した。

本来であれば、角田が勝ち上がり、第二段階の戦いがある予定だったが、角田は、ブシャール(フランス)に肩車で「技あり」2つを奪われ、終盤の寝技の猛攻もかなわず敗退。結局、このブシャールを阿部が内股と上四方固めで「技あり」2つを奪って快勝。決勝へ駒を進めた。

決勝の相手は、反対側のブロックからスルスルと勝ち上がってきた好調・立川莉奈(福岡大学3年)。

講道館杯の決勝でも同対戦で一本勝ちしている阿部は、46秒、引手で袖を掴み、釣り手をそれに添えるような形で背負い投げに入れば、立川の身体はきれいに弧を描いて背中から落ち「一本」。世界一の志々目、世界2位の角田が出場したこの大会での阿部の優勝は、来年のアゼルバイジャン世界選手権代表争いにおいて非常に大きなポイント。同時に、2020年東京に向け大きな一歩を踏み出したと言っていいだろう。

▲ 52kg級決勝。阿部詩が背負い投げで立川莉奈に快勝。

新旧世界女王対決は近藤に軍配！

48kg級は今年のブダペスト世界選手権を制した渡名喜風南(帝京大4年)と2014年チェリャビンスク世界選手権優勝の近藤亜美(三井住友海上)、新旧世界王者対決が一番の見どころだったが、この二人の対決はシードの関係で思いのほか早い段階での実現となった。

プールBに配された両者。まずは2回戦で近藤がリショニー(イスラエル)を巴投げ「技あり」で破ると、渡名喜もバッタミール(モンゴル)から体落とし、背負い投げ、浮技などで3つの「技あり」を奪って優勢勝ち。両者ともに順調な滑り出しで、ライバル対決となった。

同い年ということもあり、ライバル心の強い両者は、試合前から気合の入った表情を見せた。試合はまさに一進一退。足を飛ばしあい、近藤が払い腰、大外刈りを出せば、渡名喜も得意の背負い投げを繰り出す展開。終盤になり、渡名喜がやや無理な体勢から小外刈を掛ければ、近藤はこれを力でひねりつぶしそのまま袈裟固めに抑えて「一本」。手を叩いて喜ぶ近藤。しばらくあおむけのまま放心状態の渡名喜。この勝負の重要性が二人の表情から感じ取れた。

この一戦で勢いに乗ったかのように思えた近藤だが、続く準決勝ではカン・ユジョン(韓国)に巴投げで「技あり」を奪われる苦戦。しかし、近藤は落ち着いて試合を立て直すと上四方固めで逆転の一本勝ち。決勝進出を果たした。

決勝の相手は、これまた強豪のムンフバット(モンゴル)。昨年のこの大会のチャンピオンでもある。

▲48kg級決勝。近藤が宿敵ムンフバットとの激戦を制し2年ぶり3度目の優勝。

過去、何度も対戦しており、幾度かの敗戦も経験している相手だが、近藤は臆することなく、大外刈り、巴投げなどで攻める。パワフルな組み手のムンフバットに苦戦を強いられるも、GSに入り、ムンフバットの背負い投げをかわすと、素早く動いて袈裟固めに極め、最後は崩れ上四方固めに変化して一本勝ち。2年ぶり3度目の優勝となった。

近藤と渡名喜、同級生対決はさらに激しさを増していきそうだ。

世界2位の芳田が3連覇 日本が上位を独占！

ブダペスト世界選手権で死闘の末、悔しい銀メダルだった芳田司(コマツ)にとっては再出発となるこの大会。一昨年のこの大会で優勝して名を上げ、昨年のこの大会で連覇し、地位を確実なものにした。果たして、3連覇のかかったこの大会で、芳田がどんな試合をして見せるのか。また、講道館杯で久々にいい試合を見せ優勝を成し遂げた山本杏(パーク24)が、講道館杯の好調が一過性のものではないと証明できるか、そんなところも見所として挙げられた。

海外からも、リオデジャネイロの金メダリスト・ラファエロ・シルバ(ブラジル)、世界選手権3位のルセボー(フランス)、クリムカイト(カナダ)などの有力選手が集まっていたが、シルバは初戦でモンゴル選手に反則負け。クリムカイトも玉置桃(三井住友海上)に反則負け。そしてルセボーは宇高菜絵(コマツ)に大外刈り、支え釣り込み足で「技あり」を取られ、そのまま横四方固めに抑えられて一本負けを喫した。

結局、決勝に進んだのは、芳田と山本。玉置と宇高は3位決定戦に進み、玉置がレン(台湾)を横四方固め、宇高は豪快な大外刈りでカラカス(ハンガリー)に一本勝ちし、日本が上位を独占することとなった。

決勝は、3連覇を狙う芳田と、復活を期す山本の対戦となり、山本が講道館杯から続く好調さで芳田を苦しめたが、芳田は調子があまり良くないながらも、GSに入っても気持ちを切らさずに戦い続け、最後は一瞬のチャンスを逃さず、右袖釣り込み腰で山本を投げて「一本」。前に出て積極的な試合をしていた山本だったが、あと一歩及ばず。芳田が3連覇を成し遂げた。

万全でなくとも勝つことが必要とされる階級の第一人者。芳田にとっては、今回の優勝も大きな意味のあるものになりそうだ。

▲57kg級決勝。芳田が一瞬のスキを突く背負い投げで「技あり」奪い辛勝。

田代がケガから復活し、グランドスラム初制覇

昨年のブダペスト世界選手権には、選手の派遣が見送られた63kg級。昨年のこの大会で唯一のメダリストになった嶺井美穂(桐蔭横浜大2年)がこの大会に出ていないことからも、この階級の不安定さが感じられる。

東京オリンピックに向け、立て直しが急務と言われて久しいこの階級に、久々にいいニュースが生まれた。

田代未来(コマツ)の復活である。田代は2014年のチェリャビンスク、15年アスタナと世界選手権2大会で銅メダルを獲得、16年のリオデジャネイロでは惜しくもメダルを逃した。その後、古傷の手術を行ない、ついに復活。この舞台に戻ってきたのだ。

久々の大舞台にも関わらず、この日の田代は終始落ち着いており、ノーシードから、得意の寝技を駆使して着実に勝ち上がると、準々決勝ではシュレシンジャー(イギリス)、準決勝ではトルステニャック(スロベニア)といった世界の一線級を破って決勝へ進出。決勝では、好調の鍋倉那美(三井住友海上)に対し、ここでも終始落ち着いて試合を進め、場外際、低い体勢で入った払い巻き込みで「技あり」を奪取。その後、鍋倉の攻めをしっかりと凌いでタイムアップ。田代が嬉しい復活優勝を果たした。惜しくも決勝で敗れた鍋倉も最近では出色の出来だった。今大会では、日本人同士の決勝となったが、外国人選手が非常に力のあるこの階級。3位に入った津金恵(筑波大4年)、今回はチャンスを生かしきれなかったが大きな経験をした土井雅子(環太平洋大4年)、そして田代、鍋倉ら同世代が切磋琢磨し、2020年に向け、さらなる進化を望みたい。

▲63kg級決勝。田代未来が復活を感じさせる見事な優勝を果たした。

女子階級別順位表

階級	48kg級	52kg超級	57kg級	63kg超級
優勝	近藤 亜美(三井住友海上)	阿部 詩(夙川学院高校2年)	芳田 司(コマツ)	田代 未来(コマツ)
準優勝	U.MUNKHBAT(モンゴル)	立川 莉奈(福岡大学3年)	山本 杏(パーク24)	鍋倉 那美(三井住友海上)
3位	渡名喜 風南(帝京大学4年) B.JEONG(韓国)	志々目 愛(了徳寺学園職員) A.BUCHARD(フランス)	玉置 桃(三井住友海上) 宇髙 菜絵(コマツ)	津金 恵(筑波大学4年) T.TRSTENJAK(スロベニア)

▲63kg級表彰。左から2位の鍋倉、優勝の田代、3位の津金とトルステニャック。